

## 「闇が力を振るっている」(ルカによる福音書二二章三九〜五三節)

### 1 御心のままに

福音書が一致して伝えているように、イエスが、弟子たちとエルサレムに入られたのは日曜日です(一九・二八)。

今日の聖書箇所を書いてあることが起こったのは、それから四日目、木曜日、その夜です。この日、日中、ペトロとヨハネが、イエスの命に従って、エルサレム市内で過越の食事の準備をします。「席の整った二階の広間」(二二・一二)がそのために確保されます。

夕方、予定の「時刻になって」(二二・一四)、イエスは、弟子たちと、そこで過越の食事をいたします。それは最後の晩餐でした。私どもが二回前の日曜日に学んだ通りです、それからイエスは、オリブ山に向かいます。弟子たちもそれに従います。オリブ山といっても、目的地は途中のゲッセマネという場所でした。その地名はルカには出てきません。エルサレムの東、都の門を出て、キデロンの谷を渡って、山に登りはじめてすぐ、つまり山の麓にあります。

有名なゲッセマネの祈り、それが今日の聖書の前半です。今日はそこから、イエスを捕えようとしてきた者たちとイエスが対峙するところまでです。その者たちの先頭に何と「十二人」の弟子の「一人」ユダがいたわけです。実際捕らえられるのは次の段階です。

さてイエスが祈りの人であったことは、福音書が、そのはじめから書いていることです。また、祈りについて、機会あるごとに、弟子たちに、直接、例えば主の祈りのような形で、あるいは「やもめと裁判官」(一八・一以下)というような譬えを通して教えてこられたことも私どもは知っています。

そうしたたくさんの祈りに関する箇所の中で、どうしてこのゲッセマネの祈りが実際私どものところに強く焼き付けられているのでしょうか。一つの理由は、祈りの激しさにあつたのではないかと思えます。

天使が天から現れて、イエスを力づけた。イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた(四三〜四四節)。

この二節は、括弧に入っているように、後から付加された、二次的なものと考えられているようです。

しかしこの祈りは、その状況からして、少し文学的な表現ではあっても、実際そのようなものであつたのではないかと思えます。マタイやマルコには、別の言い方で、「ひどく恐れてもだえ始め」とか、「死ぬばかりに悲しい」という言葉も伝えられています。いずれも祈りの激しさを伝えています。

祈る姿勢については、マタイは、「うつ伏せになり」(二六・三九)、マルコは「地面にひれ伏し」(一四・三五)、そしてルカは「ここに」あるように「ひざまずいて」となっています。

それはともかく、このイエスの祈りのもっとも重要な部分は、その祈りの内容にあ

ります。こうです。

父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください（四二節）。

「この杯」とは、もちろんイエスにいま迫っている苦難と死です。あるいはイエスの運命、定め、分と聞いていいかも知れませんが（詩編一六・五）。イエスは試練の只中にいます。そこから助け出してくれるように、イエスは「父」としての神に願っています。

彼はもつとも厳しい選択の前に置かれています。神から差し出された杯を回避することがもし許されるなら、イエスの死を望んでいるサタンの目論見を挫折させることができます。この苦難と死を一瞬でも逃れようとしたのは、そのためだったのでしようか。たとえそうであったとしても、最後は、御心に従います。「わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」、御心なれかし、と。それがイエスの結論です。自分の十字架の死、それがいまサタンの勝利に見えようとも、メシアとしてのイエスの辿るべき道なのです。

## 2 ユダの裏切り

いずれにせよ、事は決まりました。神の御心が行われるように。神の御心に従う。その意味で、ゲッセマネの祈り、この祈りの戦いは、福音書の描くイエスのご生涯の分水嶺です。決定は下された。それゆえイエスの態度は、彼をとらえようと群衆が押しかけてきたとき、弟子たちがあわてふためいたのとはまことに対照的に、落ち着き払ったものでした。

十字架への道を歩むこと、それは死の勝利、サタンの勝利、イエスの敗北なのでしようか。おそらく弟子たちには、そのように見えたことでしょう。それゆえに一人の弟子が、イエスを捕らえようとやってきた大祭司の僕に、剣をもって切りつけることも起こったのです。

イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダという者が先頭に立って、イエスに接吻をしようと近づいた。イエスは、「ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか」と言われた（四七〜四八節）。

先頭に立っていたユダがイエスに接吻をしようとしたのは、イエスがどの人か、押しにかけてきた、仲間の者たちに知らせるためです。イエスを知らなかった者が多かったからです。

「十二人の一人で」というのは、ユダを紹介するとき、福音書が決まって使う言葉です。ペトロは後に、使徒言行録で、ユダが、自分たちの「仲間の一人」であったこと、「同じ任務を割り当てられていた」（一・一七）者だということを、強調しています。もともと弟子ではなかったと無関係を強調してはいません。むしろ自分たちの中の一人が、という驚きと反省が混じっています。

そのユダが、なぜイエスを裏切り、引き渡したのか、今日の箇所には、それに関わる言葉はありません。私もとくに申し上げることはしません。最終的には私どもにも分らないことです。ルカも、彼の中にサタンが入った（二二・三）としか説明していません。

ただ、一つ言えることは、ユダにとってイエスは、イエスに従い、共に生活する中で、自分の期待するものと、だんだんに違っていたということです。ユダが期待していたのは政治の世界のことです。イスラエルを、他民族、この場合はローマ帝国の支配から、力をもって解放する、そうした救世主を、イエスに期待して、従って行ったと推測されます。しかしイエスはいつまで待ってもそうした救い主として歩もうとしなかった。神の恵みの支配を、神の国がそこに来ていることを語り、悔い改めそれを信じ受け入れていくところに開かれる生き方を万人の福音として宣べ伝えたのです。この福音は、この世でだけのことではない、神の国の到来はまだなのであり、希望をもってそれを生きるべきものでした。

ユダは、イエスが裁判で有罪になったと聞き、自分のしたことを「後悔し」手にした銀貨三十枚を当局に返そうとします。しかし突き返され、結局それを神殿に投げ込んで首をつって死んでしまいます（マタイ二七・三以下、使徒一・一八〜一九）。自爆、彼は内面的に立ちゆかなくなってしまうたのです。

### 3 試みに逢わず

さてこのユダを先頭に、一群の、イエスを捕らえようとしてきた者たちとのあいだに起こったことが、次に記してあります。

イエスの周りにいた人々は事の成り行きを見て取り、「主よ、剣で切りつけましようか」と言った。そのうちのある者が大祭司の手下に打ちかかって、その右の耳を切り落とした。そこでイエスは、「やめなさい。もうそれでよい」と言い、その耳に触れていやされた（四九〜五一節）。

この出来事は、すべての福音書に書いてありますが、イエスの言葉も含めて細部は少し違っています。ヨハネによる福音書では、切りつけた人はペトロ、耳を切り落とされた者の名はマルコスとなっています。

また他の福音書と違って、私どものこのルカによる福音書は、イエスがそのマルコス、耳を切られた者を、耳に手を触れいやされたと書いています。これはとくに目立った記述です。

ところで、よく読むと、なるほど実際に切りつけた、「打ちかかって」行ったのはペトロのようですが、剣で切りつけましようかと言ったのは、イエスの周りにいた弟子たちみんなであったことが明らかです。そういう気持ちだが、ペトロを含めてみなぎっていたということです。

このことは、じつは、ここに来る前のイエスと弟子たちのやりとりと関係があります。先週私どもの取り上げたところです。少し分かりにくかったかも知れません。もう一度簡単に申し上げます。

とくに分かりにくかったのは、次のイエスの言葉です。「しかし今は、財布のある者は、それを持って行きなさい。袋も同じようにしなさい。剣のないものは、服を売ってそれを買いなさい」(三六節)。

これはイエスが、自分がいなくなつた後、弟子たちが遭遇するであろう厳しい状況を一つの比喩、つまり「戦い」を一つの比喩にしたものと理解したいと思えます(カルヴァン)。すべては平時とは違いますが。急を要します。「財布」も「袋」も、いまもしすでもっているのなら、そのままもって行け。戦いです、もつとも重要なのは剣です。なかったなら、服を売ってでも用意しなければならぬ。イエスはここでいわは総司令官として命令を下しているのです。

むろん「戦い」といっても、それは信仰の戦いであり、霊の戦いです。しかし弟子たちは、「剣を用意せよ」というイエスの言葉を、信仰の戦いだとは受けとりませんでした。誤解したのです。困難な状況で、力には力をもって、剣には剣をもって対抗し、戦わなければならぬ、そうしていいと考えたのです。その気持ちを表明したのが、三八節の弟子たちの言葉でした。「主よ、剣なら、このとおりここに二振りあります」。弟子たちは、その意味でやる気満々です。イエスは弟子たちのそうした誤解に憤り、そこまですておくと遮つたのです。

オリブ山、ゲッセマネでの祈りは、イエスにとって、まさに信仰の戦い、霊の戦いの決戦場でした。何が父なる神の御心なのか、それに反する思いのあることを自らの内に感じながら祈り、最後には、御心のままにといって、神に従つたのです。弟子たちはというと、その様子を見ると、そうした信仰の戦い、霊の戦いを無関係に通り過ぎて行っているようです。同じところにおいてもイエスの戦いにあずかり知ることなく、眠っていたからです。

しかしこうした弟子の姿、私どもはこれを笑うことはできません。なぜならこの弟子の姿が私どもの姿だからです。親の心子知らず。イエスがどのような思いでこの時を過ごしていたか、弟子たちは知りませんでした。全く知らなかつたと、弟子たちはずつと思っていたに違いありません。後で分かつた、それが、こうした福音書の記述となつて残されたのです。

同時に私どもが気づくのは、そのような弟子たちを、マタイやマルコは、叱責したような書き方をしていますが(「わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかつたのか」)、ルカは必ずしもそうではないことです。というのも、彼らは「悲しみの果てに眠り込んだ」のだと理解を示し、その上で誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていないさい」と命じているからです。まさにこうした、神の思いも何も知らずに眠っていたとき、その弟子たちのために、私どものために、いまイエスは十字架への道をひとり歩んで行かれたのです。

「誘惑に陥らぬよう」という言葉に最後に注意しておきたいと思えます。誘惑と訳されているのは、試練、試みです。試みに遭わないようにという意味です。それは主の祈りの一節でもあるのです。「こころみにあわせず」、悪より救い出したまえ、闇が力を振るう中で、こう祈ることを主イエスは私どもに求めているのです。